一　次の文章は、岩瀬成子『もうひとつの曲がり角』の一節です。これを読んで、後の問いに答えなさい。

小学五年生の「わたし」（畠山朋）は家の引越しを機に転校したばかりで、思ったように友だちができないでいる。母から「将来きっと役に立つから」と勧められて英会話スクールに通い始めたが、ある日スクールをさぼって脇の道を入って行き、曲がり角の先で「喫茶ダンサー」という看板を出した家のオワリさんというおばあさんに出会う。別の日に行くと同じ場所に「喫茶ダンサー」はなく、みっちゃんという小学四年生の女の子と出会った。

わたしはとてもいそいで歩いていた。

家には帰らず、学校からまっすぐ(1)あのつるバラがからまる塀のところへ行き、角をまがってみっちゃんの家に行ってみようと思っていた。

さっき、学校の昇降口で靴箱からだした靴をはいているとき、だれかに呼ばれた気がしてふりむくと、廊下を麦野さんが走ってきていた。

麦野さんはそばまで来ると、「畠山さんちの電話番号をきいていなかったから電話できなかったけど」といった。

英会話スクールのことだ、と思った。

「なに？」

「マークス先生がね、休むときには家族のおとなの人が先生に電話をしてくださいって。理由をちゃんといってくださいって。だまってクラスを休んではいけませんって」

麦野さんはランドセルを背負っていなかった。二階の廊下か、階段のところでわたしを見かけて、それで追いかけてきたのだろう。

「畠山さんに伝えてくださいっていわれたわけじゃなかったけど」

「マークス先生、怒ってた？」

麦野さんは「うーん」と口の中でいって、「でもないと思うけど」といった。「あのね、わたしに『朋さんと友だちですか』って先生はきいたの。わたし、『はい』っていっちゃったの」

麦野さんはあやまるようにいった。

「うん。あのね、いまね、わたし、すごくいそいでるんだ」

麦野さんに、みっちゃんのことを話してみようか、とまた思った。麦野さんをあの道にさそってみようか、と。だれかといっしょだと、きっと心強いと思う。曲がり角をだれかといっしょに確かめてみたい。

でも、そんなことはできない、とすぐに思いなおした。

麦野さんにあのT字路のことを話そうとすれば、英会話スクールを休んでいたのは頭が痛かったからじゃなくて、ただのずる休みだったの、とうちあけなければいけなくなる。

塀の上にのぼるのが好きな女の子（注・みっちゃんのこと）と知り合いになって、庭でおはなしを①ロウドクしているおばあさん（注・オワリさんのこと）とも知り合いになって、だからさぼっていたの、と話さなきゃいけない。どうやったら、その二人がいる道に行けるか、それをどうしても確かめたいの、と話したら、麦野さんはどう思うだろう。

そして、それだけじゃなくて、英会話スクールで英語でなにかしゃべろうとすると、暗号みたいな言葉に無理やり自分を押しこめるみたいな気もちになることや、英語でなにかしゃべっている自分は嘘の自分で、無理やり自分をねじまげているみたいな気がすること。自分のなかのごちゃごちゃする気もちをぜんぶ捨てなきゃ英語がしゃべれない気がして悲しくなってしまう、というようなことを麦野さんに話してもいいんだろうか。

「あのね、いそいで行かなきゃいけないところがあるから、わたし帰るね。ごめんね」

麦野さんはうなずいた。どこに行くの、とはたずねなかった。

わたしは校舎をでると、走って校門へむかったのだった。

ちゃんとみっちゃんの家のある道に入っていけるのかどうかわからないまま、わたしは英会話スクールと郵便局のあいだの道を入っていった。

黒い車がカーポートにとめてある家、ブロック塀につづく生け垣などを見ながら、わたしは歩いていった。道の先にあるはずのT字路のほうへは目をむけないようにしていた。

自然に歩いていけばすうっとその曲がり角に着くはずだった。なにかをしたら、みっちゃんの家のほうへ行ける、というわけでもなさそうだった。どうしてだか、いつもすうっとその道へと入ってしまうのだ。つるバラが塀にからまっている角をまがりさえすれば。

そして、そうではない曲がり角をまがっちゃうと、その道は喫茶ダンサーへとのびているにちがいなかった。

だけど、どう考えてもT字路は一つしかないはずだった。英会話スクールと郵便局とのあいだの道を歩いてきて、最初にぶつかるT字路をいつもまがっているのだから。

T字路は一つしかない。そして、そこをまがっていった先の道も一つ。

そのことを、何度もわたしは考えたのだ。このまえまで、わたしは自分が曲がり角をまちがえちゃったのかと思っていたけれど、そうじゃないらしかった。いくら注意してまがっても、そこから先の通りが日によってちがっているのだ。おなじ曲がり角の先が変わっている。

そのことをきょうも学校でずっと考えていた。

そんなことがあるはずない、とうち消しても、でも、【　A　】そうとしか考えられなかった。だから、とにかく、どうしても、もう一度、ちゃんと確かめてみずにはいられなくなったのだ。

そして、もう一つ気づいたことは、このことはわたしだけに起きているんじゃないか、ということだった。どうしてわたしだけに起きるのか、そのわけも知りたかった。

このまえ、つるバラの曲がり角のところで、英会話スクールのビルをふり返ったとき、歩いてきた道の先の景色がぼやっとかすんでいた。英会話スクールのビルのあたりは白い霧のようなものにつつまれていて、まるで消えかかっているように見えた。

みっちゃんの家がある通りは、【　B　】いまとはべつの時間のなかにある通りなのかもしれなかった。そうだとしたら、みっちゃんはいまの時間のなかにはいないことになる。みっちゃんは幽霊なのか。

きょうの昼休み、わたしはまた四年生の教室に行ってみた。そして一組と、二組と、三組で、出入り口近くにいた子をつかまえて、「このクラスにみっちゃんて子、いる？」とたずねた。

一人の男の子は「みっちゃんて、ミツアキくんのこと？」とききかえしてきた。「女の子のみっちゃんはいる？」と、ほかの子にきくと、「あ、ミチルちゃんのこと？」と、知らない女の子を連れてきた。別の子は「ミカちゃーん」と教室の後ろのほうにいる子を呼び、呼ばれてふり返った子は見たこともない子だった。

みっちゃんはこの学校にはいないのかもしれない、とわたしは思った。この学校のだれが習字教室に行ってるのかを、【　C　】調べられるのか、わたしにはわからなかったし、そろばん教室という塾のことはきいたこともなかった。このまえの三人の女の子たちの②フクソウも、なんていうか、どことなく今ふうじゃなくて昔っぽい感じだった。

もしかしたら、みっちゃんの通りは、いまよりもだいぶ昔の通りなんじゃないか、というのがわたしの③スイリだった。ならんでいるお店もなんとなくなつかしいような感じの昔っぽい構えだったし。

そんなふうに考えると、【　D　】納得がいくような気がしたのだ。

みっちゃんはだいぶ昔の、あの通りにお店がたくさんあったころに生きていた子どもなんじゃないのかな。

だけど、なぜ、と思った。なぜ、みっちゃんの通りにわたしだけが入っていけるんだろう。わたしがそんなことを望んでいたわけでもないのに。どうしてそんな道に迷いこんでしまったんだろう。みっちゃんは、いったいだれなんだろう。

曲がり角には、あたりまえのように緑のつるが塀にからまっていて、わたしはその角をまがった。

そして、(2)その通りがあの通りだということがすぐにわかった。

目の前に金沢荒物店があった。

わたしは歩くスピードをゆるめて、ゆっくりと道を歩いていった。なぜいま、うまくこの道に入ってこられたのか、その理由はわからないままに。

A 通りのむこうから黒い自転車に乗った男の人がやってきた。色あせたシャツを着て、麦わら帽子をかぶったその人は、遠慮のない目でわたしをじろじろ見ながら通りすぎていった。自転車の後ろの四角い荷台には鍬が一本くくりつけられていた。

みっちゃんは塀の上にいなかった。門の扉もしまっていた。

耳をすますと、塀のむこうからカシャカシャと金具がこすれる音がきこえていた。庭につながれているサブの鎖の音にちがいなかった。

レンガ塀の、ところどころにあいている小窓から塀のむこうの庭をのぞいてみたけれど、サブの姿は見えなかった。

B レンガ塀の手触りはしっかりとしていた。これが幻であるはずがなかった。

わたしは自分の足の下を見た。立っている地面は硬く、少しでこぼこしていた。道の端に小石がたまり、雑草が地面にはうように生えていた。これが嘘であるはずがなかった。わたしは空を見あげた。空は青く、透きとおっていた。

(3)目の前の門柱を見ると、そこに「尾割」と表札がかかっていた。なんと読めばいいのか、わたしにはわからなかった。

足音がきこえた。

帽子屋の前をみっちゃんが歩いてきていた。水色の手さげを持って、うつむいて歩いている。手さげからはケースに入った四角いものがのぞいている。

みっちゃんが顔をあげた。わたしを見て、「あ」という顔になった。

みっちゃんは小走りになってわたしに近づいてきた。

(4)「こんにちは」とわたしはいった。

「こんにちは」と、みっちゃんもいったけれど、その声はよわよわしい感じだった。

「どうかしたの?」

(5)みっちゃんは目をそらして首をふった。

「あのね、いいたくなかったら、べつに無理にいわなくてもいいよ。だけど話してくれてもね、わたしはみっちゃんからきいた話はぜったいにほかの人にはいわないよ。というか、いえないんだよね」とわたしはいった。

だってね、わたし、たぶんいまだけこっちに来ているんだから、といいたかったけれど、いわなかった。そのことについては、うまく説明できそうになかったし、自分のなかでも、まだはっきりと確信が持てているわけじゃなかったから。

うん、とみっちゃんはうなずいて、「あのね」と、わたしを見あげた。「きょうね、そろばん教室をやめたの」とみっちゃんはいった。

わたしはみっちゃんの手さげに目をやった。手さげからのぞいているケースに入っているのがそろばんだろう。四年生のときに学校で習ったから知っている。枠のなかにならんでいる玉を上下にうごかしてたし算やひき算をするのだ。

「そうなんだ」とわたしはいった。「どうして?」

「サキエちゃんがそろばん教室に入ってきて」

「サキエちゃんて?」

「えーと」と、みっちゃんは塀のほうに目をやって、それから自分の足もとを見

た。

「もしかして、このまえ、みっちゃんにいじわるなことをいってた子? あの三人のなかのいちばん背の高い子?」

「そう」

ふーん、とわたしはいった。あれからあの三人とみっちゃんのあいだに、なにがあったのだろう。みっちゃんはあのあとも、あの背の高いサキエって子からいじわるなことをいわれたりしたのだろうか。

「来週から、ユミちゃんとマリちゃんも、そろばん教室に来るんだって」

マリちゃんというのは、たぶん二番目に背の高い子だろう。

「いやがらせみたいだね」とわたしはいった。

「いいの」とみっちゃんはいった。「わたし、もともとそろばんが習いたかったわけじゃないもん。上手にもならないし。いつも答えがあわないの。お母さんに『行きなさい』っていわれたから行ってたの。『将来かならず役に立つから』って。でも、『やめます』って、わたしきょう、先生にいっちゃったんだ」

「来週から、あの三人がいっしょに来るんじゃね。いやだよね」

「そうだけど。でも、そんな理由でやめるってお母さんにいったら、『だめ』って、きっと反対されると思うの。わたし習字もやめちゃったし。『そんなことだと将来困る』って、お母さんにまたしかられると思う。お母さんは、わたしが将来ちゃんと生きていけるようにって心配してるんだと、それはわかってる。でも、わたし、自分がしたいかどうかもわからないことをがまんしてつづけたくないの。このまえ、お母さんに『親のいうことをきかずに、(6)好きなことだけしているおまえの頭は空っぽだ』っていわれたけど、いいの。空っぽにしていたいの。わたし、もうきめたの」

「そうかあ」とわたしはいった。「そういうことがきめられるみっちゃんて強いよね。わたしだって英会話スクールをやめたいんだよ」

(7)わたしはそういって、はっとした。そんなことを自分がいうなんて思っていなかったから。

「あ、でも来てくれてちょうどよかった。ねえ、ちょっと見てくれる?」とみっちゃんはいった。

みっちゃんは手さげをレンガ塀にもたせかけて置き、畑のほうへむかって走っていった。角まで行くと針金をまたいで畑に入っていった。むこう側から塀にあがるつもりなんだな、とわかった。

みっちゃんは塀の上をわたしのすぐ前まで歩いてくると、両手を上にあげてくるっと一回まわり、そのまま片足でとんとんとジャンプしてみせた。

「すごい」とわたしはいった。

みっちゃんはうれしそうにわらった。

「それ、新しいダンス?」

「ふふ」とわらって、みっちゃんはまた両手を上にあげてさっきとは反対まわりにくるっとまわり、とんとんとジャンプした。

わたしは拍手した。

「いい? 見てて」

みっちゃんはそういうと、両手を上にあげ、それからゆっくりと塀の上で側転をした。一回、二回、三回。塀の角のところまで行くと、またこちらにむかって側転してもどってきた。手も足もぴんと伸びている。

「どっちの方向へも側転ができるようになったの」とみっちゃんはいった。

「すごい、すごい」

わたしは拍手した。

みっちゃんは肩をすくめて、うれしそうにわらった。

C「新体操の選手になれるんじゃないの?」とわたしはいった。

「え、なに、それ」

「あ、いや、いい。それより、ちょっと待ってて」と、わたしはみっちゃんにいった。

わたしは畑のほうにまわった。できるだけ畑の土を踏まないようにして、端っこの塀に沿ったぎりぎりのところを歩いて盛り土のところまで行った。そばにランドセルを置くと、盛り土にあがって塀に飛びついた。

塀の内側にならんでいる庭木の枝のあいだから、軒下にサブがつながれているのがみえた。サブはこっちを見ていたけれど、吠えはしなかった。わたしはそろそろと塀の上を歩いてみっちゃんのそばまで行った。

「やっぱ、高いね」とわたしはいった。むかいの家の黒い屋根瓦が見える。そのむこうにも黒い瓦の家がつづいている。

みっちゃんは首をすくめて「うふふ」とわらった。

「みっちゃんて、一人でいたって平気なんだね」とわたしはいった。

サキエって子や、もう一人の子にいじわるされても、みっちゃんはこの塀の上に立って、空のほうを見ていられるのだ。

「みっちゃんは大きくなったら、なんになるつもり？」

新体操のことは、きっといまのみっちゃんにはわからないだろうな、と思いながらきいた。

「えー、わからないよ、そんなこと」とみっちゃんは首をかしげた。「大きくなったらって、それは体が大きくなったらってことでしょ」

「ちがうよ。体も大きくなると思うけど、心がおとなになったらって意味だよ」

「心って、いつおとなになるの？」

「それがねえ、わかんない」

「この心はずっと変わらないような気もするけど。このことはずっとおぼえていたいなって思うこともあるしね。いまの自分が消えて、べつの心を持った人になるっていうのはいやだな。そりゃあ、ちょっとまえのわたしと、いまのわたしはちがうし、ちがっちゃったら、もう二度ともとにはもどれないって、それはわかるけど。でも、いまの気もちもおぼえていたいと思う」

「うん」

わたしはみっちゃんの声をききながら空を見ていた。(8)

「あのね、わたし、いつも木とお話ししてるの。忘れたくないと思っていることは木にお話ししているの。もしもわたしが忘れても、木はおぼえていてくれるはずだから」とみっちゃんはいった。

「木って？」

「この木。センダンっていうの」

みっちゃんは手を伸ばすと、塀のすぐ内側に立っている木の枝に触れた。

「センダンはね……」と、みっちゃんがいいかけたとき、わたしは「あ」と思った。センダンの木と話をしている人なら知ってる、と思った。

「見てて」とみっちゃんはいった。そして、センダンの枝に足をかけ、幹に体を預けるようにして取りついた。木がゆれた。

「あぶないよ」と、思わずわたしはいった。

「だいじょうぶ。この木はわたしの木だもん。おじいちゃんがそういったの。ミツホの木だよって」

みっちゃんは幹につかまって枝に足をかけた。そしてまた上の枝にもう一方の足をかけた。木がゆらゆらとゆれた。

「みっちゃん、枝が折れるよ」

わたしが声をあげたとき、枝が大きくしなった。

あ、と思った。

(9)そのとき、きらきらした光が木の周囲をとり巻いた。光は空のほうからふりそそいでいるように見えた。

「みっちゃん」と呼んだ自分の声は、どこか遠くからきこえているようだった。

つぎの瞬間、わたしは塀から道に落ちていた。膝と腕を強く打ちつけた。

「いたあ」

そろそろと立ちあがって膝を見ると、すりむいて、血がにじんでいた。

「飛べたね」

木の上からみっちゃんがいった。さっきの光はもうどこにもなかった。

「落ちたの」とわたしはいった。

「ううん。飛ぶときみたいに、両手をひろげたよ」

そうみっちゃんがいったとき、塀のむこうから、みっちゃんを呼ぶ声がきこえた。

みっちゃんは「はーい」と返事をして、するすると木から塀におりると、ふわっと塀からわたしのそばに飛びおりた。

「ねえ、みっちゃん。さっき、きらきらしてたよ」とわたしはいった。

みっちゃんはくっとわらった。「きらきら？」

みっちゃんは手さげを取りあげると、門のほうへ行きながら「じゃあね、またね」といった。

「さよなら」とわたしはいった。

みっちゃんは門に入っていくまえに、わたしをふり返った。そして、「さっき、そっちもきらきらして見えたけど」といった。

みっちゃんはわたしにむけて手をぱたぱた振ると、門に入っていった。

問一 ═══**線①**〜**③**のかたかなを漢字に直しなさい。

問二 ═══**線(1)**「あのつるバラがからまる塀のところへ行き、角をまがってみっちゃんの家に行ってみようと思っていた」とありますが、それは何のためですか。それがわかる部分を1ページの本文中から三十五字以内で探し、始めの五字を答えなさい。

問三 2ページ上段2行目までの場面についての説明として**適切でない**ものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「わたし」は麦野さんが自分に近づいてくる理由が理解できず、わずらわしいと思っている。

イ 「わたし」も麦野さんもたがいに相手と友だちになりたいと感じながらためらい、思い切れないでいる。

ウ 「わたし」は英会話スクールに通い始めて以来レッスンにどうしてもなじめない思いを持ち続け、悩んでいる。

エ 「わたし」はみっちゃんの家のある通りが昔の通りで、自分だけがタイムスリップしている可能性があると思っている。

問四 【 A 】〜【 D 】に入ることばとして最も適切なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア どうやったら　**イ** なにもかも　**ウ** どうしても

エ もしかすると

問五 ═══**線(2)**「その通りがあの通りだということがすぐにわかった」とありますが、ここから後の部分は「わたし」が過去にタイムスリップしている場面であり、本文中にはそこが何十年か前の過去であることを表そうとしている記述があります。それに**あてはまらない**ものを文中の〜〜〜**線A**〜**D**から一つ選び、記号で答えなさい。

問六 ═══**線(3)**「目の前の門柱を見ると、そこに『尾割』と表札がかかっていた。なんと読めばいいのか、わたしにはわからなかった」とありますが、みっちゃんがオワリさんであることにみっちゃんのせりふから「わたし」が気づく瞬間がこの後にあります。そのせりふを本文中からぬき出しなさい。

問七 次の**ア**〜**カ**について、「わたし」とみっちゃんの説明としてあてはまるものには ○ を、そうでないものには ✕ をそれぞれ答えなさい。

ア ═══**線(4)**「『こんにちは』と、みっちゃんもいったけれど、その声はよわよわしい感じだった」とあるが、この後みっちゃんは「わたし」と話すことを通して自分の考えを確かめ、迷いから抜け出して明るさや元気をとりもどしていく。

イ ═══**線(5)**「『あのね、いいたくなかったら、べつに無理にいわなく

てもいいよ。……いえないんだよね』とわたしはいった」は相手の信頼を大事にするという意味で、「わたし」がみっちゃんに対して友だちになりたいと働きかけた振る舞いである。

ウ ――線(7)「わたしはそういって、はっとした。そんなことを自分がいうなんて思っていなかったから」とは、英会話スクールをやめたいと自分の意志をはっきりことばにしたこと、また自分の秘密を人に打ち明けたことへの驚きである。

エ ――線(8)で「わたし」が塀の上にあがって「空を見ていた」のは、みっちゃんといっしょに同じ行動をとることでみっちゃんのような強さを自分も持ちたいという願いの表れであり、みっちゃんを見返してやりたいと熱くなったからである。

オ 「わたし」とみっちゃんとの間では時代の違いもあって話がかみ合わず、たがいにひとり言をつぶやくばかりで、心と心が通い合うことはない。

カ みっちゃんにとって「わたし」は、だれにも知られずに練習している秘密のダンスを見せたり、胸の奥で一人で考えていることを打ち明けて話すことができる大切な存在になっている。

問八 ――線(6)「空っぽにしていたいの」とありますが、このときのみっちゃんの思いの説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 今の気持ちや今しかできないことを大切にしたい。

イ 親の言うことには従いたくない。

ウ もうくよくよ悩みたくないし、何も考えたくない。

エ いじわるする三人ともうまくやっていきたい。

問九 ――線(9)「そのとき、きらきらした光が木の周囲をとり巻いた。光は空のほうからふりそそいでいるように見えた」とは「わたし」のタイムスリップの表れですが、みっちゃんにとっても「わたし」は、普段は会えないのにたまにどこからか現れる不思議な存在だったと考えられます。そのことが表れているみっちゃんのせりふを、これより後の本文中からぬき出しなさい。

問十 「わたし」とみっちゃんとが出会うことになったのはなぜでしょうか。本文全体を読んであなたの考えを書きなさい。

問十一 本文の「わたし」の心情の変化について次の問題「二」の清水眞砂子「問いを受けついで」本文の内容をあてはめると、「わたし」の迷いが晴れて気持ちが明るくなるのは「わたし」が何かに気づいたことによると考えられます。どのようなことに気づいたのですか、説明しなさい。

二 次の文章は、一九九九年に作家・清水眞砂子（一九四一年生まれ）が評論家・鶴見俊輔（一九二二年生まれ）と対談し、児童文学の作家たちが投げかけてきた現代日本人の課題に関する問いを受け議論を深めてゆこうとした「問いを受けついで」の中の、清水眞砂子の発言の一節です。これを読んで、後の問いに答えなさい。

それから、いくつか「平和をうまく生きのびるために何をすべきでしょうか」というご質問がありました。これは、私自身のこのところの大きなテーマのひとつです。一九八六年に子どもの本世界大会が、青山の子どもの城で開かれましたときに、私は(1)戦争を生きのびるよりも、ひょっとしたら平和を生きのびるほうが難しいのではないかと発言しまして、日本の作家たちからひどく叱られました。「あなたは体験していないからだ」と言われました。そのとき、「私も多少は体験してるんだけどな」と言おうと思いましたけれど、(2)それを言い始めますと、悲惨さコンクールみたいになってしまうので（笑）、言いませんでした。

こういうことを、私がいまあえて申し上げるのは、実は児童文学とよばれる文学作品のなかには、今、平和を生きのびる助けになるものがたくさんあるように思われるからです。たとえば、イギリスのフィリッパ・ピアスの作品。あれは、ほとんどドラマというドラマのない日常を書いています。私たちの日常というのは、たいていそういうものだと思うんです。

いつかフィリッパ・ピアスさんと話していましたら、私の人生は、およそイベントフルとはいえないものだったと思うわよ、とおっしゃいました。私などの目にはとてもそのようには見えないのですが。特に、フィリッパ・ピアスさんのお連れあいは、シンガポールで日本軍の捕虜になって、ひどい体験をしておられます。ピアスさん御夫妻のいちばんの親友という方から、私はそのことを聞かされまして、もしあの苛酷な捕虜体験がなかったならば、彼はもう少し長生きできたのに、と言われました。

そういうつらさもいっぱい抱えて生きてこられた。「私は子どもたちを描くときに、何か目立つ子どもや、何かができる子ども、逆に何かがまるでできないといった、そんな子どもは描かないようにしているのよ」。ピアスさんは言いました。「そうじゃなくて、(3)本当にどこにでもいて、だけどあまりに普通なために目立たない、存在さえ忘れられそうな子ども。声も大きい声を出さないし、何か特別なことをするわけでもない。そういう子どもの中に、実はたくさんの喜びや悲しみ、恐れ、不安がつまっている。日常を生きていくこと、そのことが実はドラマなのだと、そういうことを書きたかったの」そう、おっしゃるんです。これこそ平和を生きのびることを可能にする精神じゃないでしょうか。

私が大学のキャンパスを歩いていますと、学生たちの声が聞こえてきます。「ねえ、なんか面白いことない？」「ねえ、なんか面白いことない？」「最近なんかあった？」「なんにもない」と学生たちは言ってるんですが、でも本当は面白いことはいっぱいある。学生たちと児童文学の作品を読んでいきますと、学生たちは、自分たちも日々そういうドラマを生きていることに、気づかされるんですね。目をこらせばドラマはいっぱいある。自分が過ごしている時間が、実は何も語るに値しない、書くに値しない時間だと思っているけれども、文学作品に出会うことで、そのなんでもないと思っていた日常がキラキラ光りだすんです。

これは『学生が輝くとき』（一九九九年刊、岩波書店）にも書きましたが、ニュージーランドのマーガレット・マーヒーの『ヒーローのふたつの世界』という作品を学生と一緒に読んだことがあります。これは、家族のなかで、それぞれが独自の人間であろうと努力しているのだけれど、時にはそのことがたいへんな①フタンを子どもに強いることがあるのだといったことを書いた作品で、本当は教師としてはそういうところを読み取ってほしいと思っていたのですが（笑）、学生たちに作品を読んでいちばん面白かったところはどこかと聞いていきましたら、(4)ある学生が「私はぶらんこをうんと大きく揺すってひっくり返りそうになる、

その瞬間に一瞬止まりますよね。あの一瞬止まったところを書いてくれていた。そこがこの本の中でいちばん好きだ」と言い出したんです。

たぶんそのとき学生は、それまでずっと忘れていたこと、心のひだの隅っこに葬り去られていた子ども時代の小さな体験を思い出したんですね。しかもそんなことは書かれるに値しないと思っていたのに、こんなふうに作品に書かれている。「そうか、自分の中にも、いっぱい語るに値する瞬間瞬間があったんだ。なんでもないと思っていたけれど、実はこんなふうに伝えられるべきものだったんだ」、彼女はそう気づいたんですね。そんなふうにして、自分の人生、自分の日常が非常に活性化されるといいますか、大江健三郎の言い方でいえば、異化される体験をしているわけですね。(5)

『子どもの本の森へ』の中で長田弘さんが、フィリッパ・ピアスの作品を読んだ後では、日常が［　(6)　］なんて誰も言えなくなる、と言っておられましたが、私は平和を生きのびるために何をすべきかを考えるとき、そういう見直しは、たぶんとても大きな力になるのではないか、と思っています。もちろんそれだけではないでしょうけれども。

オーストラリアにパトリシア・ライトソンという作家がおられます。もうかなりのお歳で、最近は作品を発表していないようですが、彼女は、私が平和を生きのびる問題についてＩＢＢＹ（国際児童図書評議会）の機関誌に短い英文を書いたとき、すぐ手紙をくれました。「私たちの世代は」、といっても私とライトソンさんはたぶん二十歳以上違うと思いますけれども、彼女はこう書いてきてくれたのです。「私たちの世代は、戦争を生きのびることには慣れているし、そういう問題は考えてきたけれども、平和を生きのびることについてはほとんど考えたことがなかったのではないか。平和を生きのびることに私たちの世代は慣れていないのではないか。それに私たちは、そのための言葉をもちあわせていない」と。言葉をもちあわせていないというのは、つまりは思想をもちあわせていないということですよね。そしてライトソンさんは続けて言っておられました。「たぶん、平和を生きのびるための言葉は、次の世代から出てくるのではないか」と。(7)

これは私にとって、とても重要な言葉となりました。私たちは「今時の若者は」という、②キゲンゼンから言われてきた言葉をついつい繰り返しますけれども、私はライトソンさんにこの言葉をいただいてから、私たちにとってわけのわからない若い人たちのさまざまな試みだとか、言葉、ファッションなどいろいろなもののなかに、もしかしたらそういう平和を生きのびるための新しい芽が出ているのかもしれない、ただ、こちらにそれをキャッチする力がないだけかもしれないと考えるようになりました。(8)

ですから、みんなが一から十まで③ヒテイしているときにも、最後の一か二は留保しておきたいと思います。もしかしたらそこに新しい芽があるのかもしれない。ただ、こちらが気づかないだけかもしれない。そう思うからです。

（清水　眞砂子『あいまいさを引きうけて』より）

問一　═══線①～③のかたかなを漢字に直しなさい。

問二　――線(1)「戦争を生きのびるよりも、ひょっとしたら平和を生きのびるほうが難しいのではないか」とありますが、その理由として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　平和な時代に甘やかされて身体が弱くなり、少しの苦痛にも耐えられなくなってしまうから。

イ　平和な時代には油断しているとすぐに悲惨さコンクールを始めてしまう傾向がみられるから。

ウ　平和な時代には乗り越えなくてはならない困難が戦争の時代とは異質なため、どのように生きたらよいかわからないから。

エ　平和な時代はそのままにしていれば自然に生きのびられるため、あえて平和を生きのびようとしないから。

問三　――線(2)「それを言い始めますと、悲惨さコンクールみたいになってしまうので（笑）、言いませんでした」とありますが、筆者が言わなかった理由として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　体験の悲惨さを語ろうとするとつい大げさに誇張してしまいがちで、後味の悪い思いをするから。

イ　悲惨さを自慢し合うようになると他の作家に悲惨さでは負けてしまいそうだから。

ウ　悲惨さを競うようになると自分が言いたい大切なことから話がそれてしまうから。

エ　本当は他の作家たちよりもずっと悲惨な経験をしているのだが、それは言いたくないから。

問四　――線(3)「本当にどこにでもいて、……実はドラマなのだ」とありますが、その例としてふさわしいものを**二つ**選び、記号で答えなさい。

ア　十一月に七五三の節句を迎えて近所にある神社にお宮参りをする。

イ　朝登校して授業を受け、今日もまたクラスの友だちと昨日の出来事について話す。

ウ　今年の二月初めに何校かの私立中学校の入学試験を受ける。

エ　夜七時ころにいつものように家族が揃って食卓に座り、語り合いながら夕食をとる。

オ　バレーボールの試合に出て、ついに念願の決勝戦に進出する。

問五　――線(4)「ある学生が……と言い出したんです」とありますが、その学生がそのように言ったのはなぜですか。「ドラマ」ということばを使って答えなさい。

問六　――線(5)「非常に活性化される」と同じ内容を別のことばで表現している部分を、これより前の本文中から八字でぬき出しなさい。

問七　［　(6)　］にあてはまることばを考え、二～五字で答えなさい。

問八　――線(7)「平和を生きのびるための言葉は、次の世代から出てくるのではないか」とありますが、それはなぜですか。説明しなさい。

問九　――線(8)「若い人たちのさまざまな試みだとか、言葉、ファッションなどいろいろなもの」とありますが、次の**ア**～**オ**についてこれにあたるものには○、そうでないものには×をそれぞれ答えなさい。

ア　学校でしっかり勉強をして自分が志す進路に進もうとする。

イ　タピオカを友だちと一緒に飲みに行きＳＮＳに投稿する。

ウ　家で食事を作ったり掃除をしたりお手伝いをして親孝行をする。

エ　好きなアニメのキャラクターのかっこうをして友だちに見せる。

オ　生物無生物、老若男女を問わずどんな対象にも「かわいい！」と感想を述べる。

二〇二〇年度　国語解答用紙

一

問一
①
②
③

問二

問三

問四
A
B
C
D

問五

問六

問七
ア
イ
ウ
エ
オ
カ

問八

問九

問十

問十一

二

問一
①
②
③

問二

問三

問四

問五

問六

問七

問八

問九
ア
イ
ウ
エ
オ

受験番号				

氏名

2020K-①